研究ノート

# 国際日本文化研究センター所蔵『諸国妖怪図巻』をめぐって
## ――いわゆる「化物尽くし絵巻」に関する一考察

木場貴俊

### はじめに

前近代の化物を描いた絵巻は、大きく二つの流派のものが現存する過半を占めている。

一つは、「百鬼夜行絵巻」と総称される、主に土佐派で描かれた付喪神や鬼などの群行を描いたもの、あるいはその流れを汲みながら改変がなされたもの（以下、土佐派系統本と呼ぶ）。もう一つは、「化物尽くし絵巻」と総称される、主に狩野派で描かれた化物の名称と容姿を個別に描いたもの、あるいは、その流れを汲んで増補したもの（以下、狩野派系統本と呼ぶ）[1]。

この二系統の絵巻群について、研究という視点から見ると、土佐派系統本を扱ったものが圧倒的に多い[2]。研究者が、土佐派系統本に注目する点として、

①伝土佐光信筆の大徳寺真珠庵本に代表されるように、室町時代から連綿と作成されている絵巻である[3]。

②その複数ある構成から、諸本の異同を検討して原図の復元を試みることができる[4]。

③詞書がないものの、化物たちの群行から、物語のコンテクストを読み解くことができる[5]。

④付喪神をはじめとする化物の造形から、その背景を読み取ることができる[6]。

などが考えられる。

一方、狩野派系統本については、

①狩野元信（一四六七～一五五九）作とされているが、作風から江戸時代、特に十七世紀末～十八世紀初から作成されたものと考えられること（それより前の作品は現在確認されていない）[7]。

②個々の化物（名称と容姿）が、ほぼ背景もない白地に描かれた、いわば図様集のようなものであるため、物語を読み取ることが難しい。また、後年化物が増補されている作品もあるが、増減を指摘するだけでは研究として成立しにくい[8]。

③狩野派系統本よりも、それを絵手本の版本に改めた、鳥山石燕『画図百鬼夜行』（一七七六刊）に関する研究の方が注目されている[9]。

などの理由により、狩野派系統本だけを研究の俎上（そじょう）に乗せにくいのだと考えられる。

狩野派系統本について、香川雅信は、江戸時代の「妖怪画」に関する系譜において、「妖怪」の命名と分類を通じて言葉による分節化・個別化を行った営為、そして「近世日本における博物学的な知性の発達を反映している[10]」と評価した。また、狩野派系統本には、俳諧などに見られる「物尽くし」の趣向も盛り込まれている。つまり、狩野派系統本は、江戸文化特有の作品ということになる。だからこそ、江戸文化としての狩野派系統本の多くの類本が、どのような流れで展開していくのかを研究する必要がある。

こうした現況のもと、国際日本文化研究センター（日文研）が二〇一八年度から所蔵している『諸国妖怪図巻』（以下、日文研本）は、上記の課題を考える上で非常に示唆的な作品である（二〇二〇年一月に日文研怪異・妖怪絵姿データベース、および絵巻物データベースにおいて公開）。この絵巻は、狩野派系統本の一巻だが、従来の絵巻にはない大きな特徴として、詞書（ことばがき）、つまり物語が記されている。また、名称の多くも、他の狩野派系統本の各化物に付けられたものとは全く異なっている。すなわち、日文研本は、個別に分節化された化物に物語を改めて付与したもの――語られる化物として再編したもの――と評価できる。

詞書が記された狩野派系統本は、日文研本以外には、現在のところ一巻しか確認されていない。しかし今回、その一巻を日文研本と比較検討することで、各巻の成立や内容比較などの考察が可能になった。さらに、調査を進めるうちに、これまで狩野派系統本との関連があまり深く追究されてこなかった別の絵巻とのつながりも判明した。

以上の点から、日文研本をはじめとする三巻の絵巻の比較検討を行い、それを通して、今後狩野派系統本の研究を進展させるた

めの一助としたい。

## 一　各絵巻に関する考察

### 1　国際日本文化研究センター所蔵『諸国妖怪図巻』（日文研本）

まず、日文研本に関する基礎情報を示しておきたい。

題簽（だいせん）には「妖怪絵詞　全」とあり、絵巻を開くと巻頭に「各地伝説　長岡多門」と鉛筆書きがあり、続いて「金子荊山[11]筆　各地伝説妖怪絵巻」という新しい紙の付箋が貼られている（その根拠は不明）。寸法は二五・七×五四九・〇センチ。巻末に「長岡多門之書」と記されているが、この人物についても不詳である。

書写された年代は不明だが、先述した現在確認できる狩野派系統本の上限が、十七世紀末〜十八世紀初頭のもの[12]だということを考慮に入れると、十八世紀後期以降に作成されたものと考えられる。巻頭部が欠けており、紙接ぎで説明が途切れている部分や、描かれている化物の図様が一部重複している箇所も見られる（後述[13]）。

そこで、日文研本の構成をわかりやすくするために、代表的な狩野派系統本である、英一蝶の弟子佐脇嵩之が元文二年（一七三七）に書写した『百怪図巻』（吉川観方旧蔵、福岡市博物館所蔵）と比較してみる（表1[14]）。表1では、それぞれの化物の名称を順番に並べ、日文研本の化物が『百怪図巻』のそれとどう対応しているのかを示している。また、本論文末に図（図1）と翻刻（翻刻1）を載せている。

日文研本の二十三体の化物は、『百怪図巻』の化物三十体に比べれば少ない。しかし、『百怪図巻』と共通する名称の化物四体（日文研本⑭・⑮・⑰・⑱）以外は、全く名称が異なっている（名称不明のものも含む）。しかも、うち八体は、従来の狩野派系統本には見られない図様のもの（①・②・③・⑥・⑦・⑩）、あるいは狩野派系統本との関係を窺わせるものの図様が異なっているもの（⑤・⑪）である。

各化物の名称は、詞書の中で説明されている（無記名の⑫と⑱山姥を除く）。⑧と⑲は、詞書と図様はほぼ同じだが（しやうけら［『百怪図巻』②］が原型）、⑧の頭部から、狩野派系統本のうわん（『百怪図巻』㉑）を取り込んだ可能性も伺わせる。⑧カコセイも⑲かもせいも、がごぜ（元興寺[15]）と呼ばれる化物で、狩野派系統本では本来⑫の図様（『百怪図巻』⑥）が相当する。その⑫は図様のみで名称がない（直前で紙が変わっているので、もともと詞書が存在していた可能性もある）。これは、同じ名称⑧・⑲の化物が既に使用されているためかもしれない[16]。

先述したように、日文研本の最大の特徴は、従来の狩野派系統本には見られない名称と詞書＝物語が記されている点である。名称と詞書の具体的な検討は次章に譲るが、ここでは、日文研本（の

原本）が制作された場所について考えておきたい。「諸国」と後世に題が付けられているように、日文研本には各地の伝承的な詞書が付されている（表1場所欄参照）。舞台となる地域は、筑前と信濃が多く、特に筑前は上座郡のものが三例ある。また、③山おしは山獠（ヤマヲトコ）の筑前における方言（後述）、㉒しい（黒青）は筑紫や周防でよく出没するもの[17]、㉓そはおしきは、ムササビの九州での方言である[18]。他の土地については、姫路や三笠山といった有名な地名以外、漠然としている。これらから、九州（特に、筑前を含む北九州）で制作されたものではないかと考えられる。

## 2　國松良康氏所蔵・福岡県立美術館寄託『化物尽くし絵巻』（台帳では「妖怪図巻」　以下、國松本）

國松本は、日文研本以外に詞書が記されている狩野派系統本として、現在確認できる唯一の作品である。寸法は、三九・五×一一〇・一センチ。國松本も作者不詳で、十八世紀以降に九州で制作されたものと推測されている[19]。國松本についても、『百怪図巻』、そして日文研本との対応関係を表2として整理し、また文末に図（図2）と翻刻（翻刻2）を載せている。図様⑮からは、漢字にルビが振られている。

國松本には、二十七体の化物が描かれ、他の狩野派系統本に見られない⑦狒々（ひひ）以外は、いずれも狩野派系統本を踏襲した図様になっている。ただし、野狐とされている⑮が狸（たぬき）、犬神とされている⑱が猫股へと部分的な変更がなされている。また、最後の㉖・㉗は一つの物語の中に登場させている。

日文研本同様、名称は、すべて詞書の中に書かれている。①へらほう、③ねこまた、⑬ろくろ首、⑲雪女、㉔川太郎、㉖火車、㉗うくめの七体は、狩野派系統本の名称に沿った詞書[20]であるが、それ以外は従来とは大きく異なっている。

日文研本と比較すると、共通する図様が十（②～⑤・⑧・⑮～⑰・㉒・㉓、日文研本⑧がうわんを取り込んでいるものならば、㉕もそのうちに含めることができる）、詞書が七点（②・④・⑤・⑥・⑰・㉒・㉓）確認できる。日文研本と國松本は、共に詞書があるといっても、相違点が多い。そのため、共通点と相違点双方の検討から、両者の関係を明らかにしなければならない。

## 3　福岡市博物館所蔵『怪奇談絵詞』

江戸末期から明治時代に筑前で描かれたと考えられる作者不詳の『怪奇談絵詞[21]』は、ヲロシヤノ人魂や蝦夷の狼などといった、外国を揶揄（やゆ）した化物などが三十二体描かれていることで知られている。寸法は、二五・一×一〇四六・二センチ。他にあまり類例を見ない図様の化物が描かれているため、土佐派系統本や狩野派系統本との関連は、これまでほとんど言及されることがなかった。

しかし、今回日文研本と國松本の分析を通して、『怪奇談絵詞』にも共通する図様や詞書が複数あることを確認できた（『怪奇談絵詞』⑨・㉔・㉕・㉖・㉗・㉙・㉚・㉜）。図様だけが狩野派系統本と類似している㉖河太郎と㉜詞書のない化物も併せて文末に紹介している（図3・翻刻3）[2]。

日文研本と図様・詞書が共通しているのは、日文研本②―『怪奇談絵詞』㉗と⑤―㉔、⑪―㉙、説明のみが共通しているものは④―⑨である。また、巻末にある名称のない化物㉜は狩野派系統本のがごぜで、名称がない点では日文研本⑫と共通している。

國松本と図様・詞書が共通しているのは、國松本⑬―『怪奇談絵詞』㉚と⑱―㉕、詞書のみが共通しているのは⑥―㉙（図様は日文研本⑪による）、図様のみが共通するのは㉔―㉖である。

なお、日文研本の②と⑤は、後半が欠落しているので、『怪奇談絵詞』で欠けた部分を補うことが可能となる（後述）。

三巻の絵巻の成立順は不明だが、『怪奇談絵詞』が日文研本と國松本双方に記された情報を描いている点から、日文研本と國松本の類本、あるいは両者を合わせた内容の絵巻を元にして『怪奇談絵詞』は描かれたと推測できる。

日文研本と國松本の関係について、図様から見れば、國松本の方が従来の狩野派系統本をある程度の名称も含めて踏襲している。一方で、國松本では引かれていない狩野派系統本の化物の名称が、日文研本では一部使用されている。現時点では、どちらの成立が早いのかを判断する材料はない。ここでは、日文研本と國松本の後に『怪奇談絵詞』が作成された可能性が高い、ということを述べるに留めておきたい。

このように、三巻の絵巻は相互で関係している。その関係性を、次章では具体的に検討していきたい。

## 二　絵巻の比較から見えてくるもの

### 1　日文研本と國松本の詞書をめぐって

まず、日文研本と國松本の大きな特色である詞書を比較してみたい（翻刻参照）。両絵巻の共通する詞書を比較すると、例えば、日文研本⑨および國松本②の一寸坊（大頭）では、日文研本だけに「長サ弐尺に足らす一借[2]に越たり」と記されているように、説明に加減は見られるものの、内容的にはほとんど違いがない。一方で、狩野派系統本の名称を残しつつ場所も内容も異なっている、猫また（日文研本⑰・國松本③）のような詞書も確認できる。そのため、ここでは主に、従来の狩野派系統本の化物の名称が使われているものを通して、両者の特徴を考察していきたい。

日文研本⑭と國松本④の飛鬼（鳶鬼）について、日文研本では「又髪切とも言」、國松本では「小き魚又ハ鳥の肉を食す、鼠をも

食す、しはらくして死するといふなり」という記述が見られる。前者は別名、後者は生態を記している。出雲の飛鬼（鳶鬼）に関する伝承の類は現在不詳だが、髪切という名称は、狩野派系統本のこの図様の化物に該当している。

狩野派系統本の名称という点では、日文研本⑮と國松本⑯も、前者は「赤口」、後者は名もなく「夜中に見たる形なれハ相違もあるへけれと大形絵に写」として、やはり日文研本は狩野派系統本の名称を用いている（鳥山石燕『画図百鬼夜行』では、赤舌）。さらに双方は、筑前国上座郡を舞台にしながらも、内容が大きく違っている（國松本の方が、物語として大掛かりなものになっている）。

また、狩野派系統本では野狐とされる、播磨国姫路城下に関する日文研⑯と國松本⑮について、前者は「オサカベノ一族[23]」、後者は名称がないものの「腹をたゝ」くことや八畳敷の陰嚢（いんのう）が描かれていることから、狸の変化であることがわかる。⑱は、犬神を猫股へと容貌を変更し、その容姿に沿った詞書が書かれている。もちろん國松本は、図様だけでなく、狩野派系統本の名前を活かした詞書も見られる。

先述のように、狩野派系統本の名称（類似も含む）を使っているものは、日文研本四（⑭、⑮、⑰、⑱）、國松本七（①、③、⑬、⑲、㉔、㉖、㉗）である。そのうち、日文研本は、國松本で使われていない名称が入った詞書（⑭・⑮）や名称と図様だけの山姥（⑱）、そして名称も詞書もない化物（がごぜ⑫）など、國松本にはない狩野派系統本の利用が確認できる。ただし、図様は國松本の方が多くを狩野派系統本から踏襲している。

以上、日文研本・國松本は、どちらも狩野派系統本の従来の体裁や内容を利用して詞書が作成されているものの、その利用の仕方については差異が見られた。日文研本・國松本双方ともに、従来の狩野派系統本に則っている部分と逸脱している部分が併存していたことになる。

## 2　狩野派系統本には見られない化物

日文研本と國松本の図様については、その多くが狩野派系統本に依拠している。しかし、中には、それまでの狩野派系統本では全く描かれたことのない図様の化物が少なからずいる[24]。狩野派系統本から見ると番外的なこれらの化物は、日文研本と國松本の間でも共通したものがいない。逆に言えば、各絵巻の大きな個性となっている。

國松本で狩野派系統本にはない図様は、⑦狒々のみである。『本草綱目』巻五十一獣部寓類怪類に載る狒々は、林羅山『新刊多識編[25]』（一六三一刊）で「わらひけもの」と和訓が与えられ、『本草綱目啓蒙[26]』（一八〇五刊）巻四十八寓類怪類で、狒々は豊前や薩摩でいう「ヤマワロ」のことで「深山中に棲む、木曽及豊前・薩州・

飛州・能州にありと聞けり」「人形に〆毛あり」という。図様は、『訓蒙図彙』（一六六六刊）やそれを元にした『和漢三才図会』（一七一二序）ではなく、『頭書増補訓蒙図彙大成』[27]（一七八九刊）巻十二畜獣に載る図と背中の部分が類似している。あるいは、博物画を参照している可能性もある。

越後国の狒々については、元禄五年（一六九二）刊の年代記『新補倭年代皇紀絵章』[28]に、天和三年（一六八三）「六月ゑちごの国桑取谷にてあやしきけだ物をうちころす、名づけて狒々といふ、その大さ四尺八寸、鼻より耳まで一尺八寸、口の両わき広一尺六寸、毛の色あか黒し、眼三寸、牙上下八寸、爪五寸足の長さ三尺八寸、毛の長さ五寸」と、狒々退治の図とともに記され、図には「ゑちこノ国にてひゝといふけた物」と見出しもある。この事件が元になっているのかは不明だが、こうした狒々出現の情報を反映して描いたものと考えられる。

続いて、日文研本を見てみる。①～③・⑤～⑦・⑩・⑪が狩野派系統本には見られない図様である。各地に伝承の類があるのかはほとんど明らかにできていないが、いくつかの化物については言及しておきたい。

③山おし（足長猿）はヤマオジのことで、ヤマジジ（山爺）やヤマチチ（山父）などと呼ばれる化物の筑前での方言である。詞書に地名がないのは、日文研本が九州で作成されたことを前提にしているためかもしれない。「こゝろに思ふ事をさとりいふ」という部分からは、いわゆるサトリの怪異を想起させる。そこで、小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻四十八寓類怪類の狒々の附録「山猿」を参考にあげる。

山猿はヤマヲトコ　ヤマヲヂ筑前　ヤマジイ讃州　ヤマチヽ阿州　深山に棲で男子の形なるものなり、昼は隠れ夜出深く山に入り、木を伐るもの数日山中に宿すれは、来りて人火に就て蟹を炙り食ふ、人これを害せんと欲すれば、山猿先づ悟る、故に銃等も打つことならず（後略）

ここから、山おし（「ヤマヲヂ筑前」）が、山猿（ヤマヲトコ）の異名で、悟る能力を有していたことが確認できる。山おしの詞書が『本草綱目啓蒙』に依拠しているのであれば、日文研本（その原本）の成立は十九世紀以降となるが、確定できる材料は今のところない。

⑦毛長猿（狒）は、『本草綱目』[29]巻五十一寓類怪類に「狒」があり、「毛柔長」との説明から「毛長猿」という和名が付与されたと考えられる。『新刊多識編』には「むくげざる」、『和漢三才図会』[30]には「むくげざる」と「また」、『本草綱目啓蒙』には「マタ」の和名が載る。なお、『本草綱目啓蒙』によれば「和産詳ナラズ」と

いう。

⑩の山伏の顔が見える怪火については[31]、摂津国に伝わる仁光坊（二根坊）と呼ばれる僧侶あるいは山伏の怨みが火になる伝承[32]、あるいは京の叢原火（そうげんび）[33]など類例がある。

このように狩野派系統本から見ると番外的な化物については、本草書などから参照できる事例や類似する事例を見出すことができる。これらは、日文研本や國松本にしか見られない化物の情報が、必ずしも作者の独創だとは言い切れない可能性を意味している。日文研本①の蝙蝠（こうもり）状のような化物[34]や⑥毛坊といった番外的な化物だけではなく、狩野派系統本の図様に依拠した化物たちの詞書（狩野派系統本を踏襲した名称の化物も含む）についても、参考にした伝承などの情報が存在する（存在した）可能性は十分にある。

詞書と関連する情報については今後も調査を行っていく必要があるが、現時点では、詞書が必ずしも作者の独創とはいえず、何らかの類例を元に書かれた可能性があることを指摘しておく。

### 3　『怪奇談絵詞』との比較

最後に『怪奇談絵詞』との関係を検討しておきたい。

まず、『怪奇談絵詞』に載る筑前国上座郡を舞台にした詞書（⑨・㉔）は、全て日文研本の詞書の内容と共通している。また、㉕猫またと㉚ろくろ首は、詞書と図様ともに國松本と共通している。

日文研本⑪と國松本⑥、『怪奇談絵詞』㉙の大和国三笠山の女頭蛇身の化物は、三者とも同内容だが、鎌首をもたげた姿の図は、日文研本と『怪奇談絵詞』が同じである。国際日本文化研究センター所蔵『化物尽絵巻』（北斎季親筆、江戸後期）には、狩野派系統本のぬれ女とは異なる「さら蛇」という鎌首をもたげた女頭に蛇身の化物が描かれている。鎌首をもたげている点では、日文研本⑪と共通しているが、さら蛇自体がこれ以外確認できないため、双方の関係については現在のところ不明である。

また、難産で死んだ母親の変化（日文研本⑤、國松本㉗うくめ、『怪奇談絵詞』㉔）については、図様・詞書ともに日文研と『怪奇談絵詞』が共通している。

続いて、前章でも触れたように、日文研本の後半部分が欠落しているものを『怪奇談絵詞』で補ってみたい。

『怪奇談絵詞』㉗に対応するのは、日文研本②である。日文研本では、『怪奇談絵詞』の「又右の渕」以降にあるべき、鵜飼に忠告する僧侶の正体が大鯰（なまず）だったという結末がない。日文研本には『怪奇談絵詞』同様の鯰顔の僧侶が描かれているものの、内容的に未完の印象を受ける。紙接ぎ部分が欠落したわけではないため（紙接ぎ部分にも文章が書かれている）、写し忘れではないかと考えられる。

別に、日文研本④と『怪奇談絵詞』⑨について。日文研本では「薬よ水よとあわて与へ」より後が欠けている。文章と絵の右半身が紙接ぎで欠けているので、おそらく絵巻に仕立てる段階で既に欠落していたものと考えられる。

上座郡赤谷村や久六という名称は共通するが、日文研本と『怪奇談絵詞』とでは、大きく異なる箇所が二つある。一つは、図様である。日文研本では、「如此成者」として『百怪図巻』（狩野派系統本）の目ひとつぼうが当てられている（欠落した接ぎ紙に本来相当すべき化物が描かれていた可能性もある）。しかし、『怪奇談絵詞』では「野女」という別の化物になっていて、図様も変わっている。野女とは、『本草綱目』巻五十一獣部寓類怪類の猩々の附録に載るもので、寺島良安『和漢三才図会』巻之四十獣部寓類怪類では、野女という独立した項目が立てられ「やまうば」という和名が当てられている。『本草綱目啓蒙』でも同じく「ヤマウバ」となっている。

もう一つの違いは、「延享の比」という年代の明記である。延享（一七四四～四八）という特定の年代が記されていることから、『怪奇談絵詞』がそれ以降の作品だと判断できる。『怪奇談絵詞』が引いた詞書には、に野女や延享年間の情報が既に記されていた可能性はあるが、「如此成者」とする日文研本の段階では、まだ追記されていなかったと思われる。

以上、『怪奇談絵詞』を日文研本と國松本と比較して見えてくるのは、『怪奇談絵詞』が従来の狩野派系統本ではなく、いわばその亜流ともいえる絵巻の影響を強く受けていたという点である。それは、三本の絵巻が九州で制作されていることと大きく関係しているためだと考えられる。

## おわりに

以上、日文研本を中心に詞書がある狩野派系統本（それに連なる絵巻）を比較検討してきた。それぞれには共通点がある一方で、相違点――各絵巻の独自性――を確認することができた。

しかし、江戸文化特有の絵巻である狩野派系統本それ自体の研究はまだまだ少ない。今後の課題として、今回の成果を踏まえながら各絵巻の比較を進めて、狩野派系統本の全体像を把握していかなければならない。

注

（1）住吉如慶（内記）が、元和三年（一六一七）に写した東京国立博物館所蔵『百鬼夜行図』（異本）など、他の流派が描いたものもあるが、土佐・狩野両派の作品の現存数に比べればはるかに少ない。

（2）国立歴史民俗博物館ほか編『百鬼夜行の世界』角川学芸出版、二〇〇九

の参考文献を参照のこと。

（3）土佐派系統本の諸本を集成したものとして、同右前掲書や田中貴子ほか『図説　百鬼夜行絵巻を読む』河出書房新社、一九九九などがある。

（4）小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』集英社、二〇〇八、山田奨治「「百鬼夜行絵巻」編集の系譜　情報学からの解明」『日本研究』四〇、二〇〇九など。

（5）田中貴子『百鬼夜行の見える都市』筑摩書房、二〇〇二など。

（6）名倉ミサコ「鍋と釜――『百鬼夜行絵巻』に見る神事の位相」『国際日本文化研究センター国際シンポジウム報告書』四五、二〇一五、西山克「「妖物絵」の誕生――『百鬼夜行絵巻』とはなにか」『関西学院史学』四三、二〇一六など。

（7）吉川観方編『続絵画に見えたる妖怪』美術図書出版部、一九二六では、後で取り上げる佐脇嵩之『百怪図巻』（一七三七写）巻末に「古法眼元信筆」と記されていることに対して、「画の技巧は別として、その風俗上より観る時は、やはり享保元文頃のやうで、とても足利時代のものとは受け取れない」（本文一〇頁）と述べている。また、辻惟雄「化物づくし」『美術手帖』二四〇、一九六四でも、『百怪図巻』については、「元文二年（一七三七）より前のものとも考えられるが、画中の〝ろくろ首〟の髪型からして、江戸の中期、元禄時代をさかのぼるものではない」（二六頁）と指摘している。なお、辻の解説で取り上げている別の狩野派系統本は、巻尾に「鳥羽僧正真筆」と記されている。

（8）多田克己編『妖怪図巻』国書刊行会、二〇〇〇、湯本豪一編『続妖怪図巻』国書刊行会、二〇〇六などは、狩野派系統本を集成したものだが、描かれる化物の増減を指摘するに留まっている。

（9）狩野派系統本と関連づけて論じているものに、香川雅信『江戸の妖怪革命』角川学芸出版、二〇一三がある。また、小林法子は、福岡県に伝存する土佐派系統本との関連で「狩野派の百鬼夜行図」を取り上げ、石燕の作品を含めた江戸時代の絵画に言及している（「守房筆百鬼夜行絵巻」『デ　アルテ』二三、一九九七、後に『筑前御抱え絵師』中央公論美術出版、二〇〇四所収）。

（10）同右香川前掲書、一四四頁。

（11）杉村顕道『儒海――儒者名鑑』大久保書院、一九七五によれば、金子荊山は三河国吉田藩の儒臣で天保年間に没したという。名は鼎、字は玉鉉、通称は熊蔵で、荊山または谷中樵者と号した（四七頁　Twitter での情報提供による）。

（12）注（7）参照。

（13）全体的に絵が稚拙なことから、長岡多門は専業の絵師ではない可能性（平田国学の門人、あるいは神職など）、また、本来日文研本は帳面などにまとめていた奇談に狩野派系統本の図様をあてはめた可能性がある（村上紀夫のご教示による）。

（14）出典は、注（8）多田編前掲書による。

（15）柳田國男「妖怪古意」「おばけの声」『新訂妖怪談義』角川文芸出版、二〇一三を参照のこと。

（16）ただし、後の②で触れる國松本では、この図様は宗像御前の怨霊・ひてり鬼とされている。

（17）黒眚については、貝原益軒『大和本草』巻十六獣類には「今案ニ此獣周防及筑紫ニハ処々ニアリ、他州ニモアリヤ未詳、其形狸ニ似タリ」とある（国立国会図書館所蔵）。また、橘南谿『北窓瑣談』では、安永年間山城国八幡付近に現れた猫の死体を食う獣（『日本随筆大成（第二期）』一五、吉川弘文館、一九七四、二七二頁）や大朏東華『斎諧俗談』（一七五八刊）には元禄十四年（一七〇一）、大和国吉野郡の山中に出没した獣を黒眚と呼んでいる（『日本随筆大成（第一期）』一九、吉川弘文館、一九七六、三五九・六〇頁）ように、西国での事例が多い。

（18）『大和本草』巻十六鳥鼠（ソハヲシキ）は「和名ムサヽビ、バンドリ、ソバヲシキ、モヽグハ、モヽガ皆一物也」で「山中ニテ飛ヒ来テ人ノ面

ヲオホフ事アリ、不知人ハ為怪物」という。また、越谷吾山『物類称呼』（一七七五刊）巻二「鼯鼠」には「むさゝび　〇畿内にて、野衾といふ、東国にて、もゝぐはと呼ふ、西国にて、そばをしきといふ」（京都大学文学部國語学國文学研究室編『諸國方言物類稱呼　本文・釋文・索引』京都大学國文學會、一九七三、十六頁）とある。

(19) 兵庫県立歴史博物館ほか編『図説　妖怪画の系譜』河出書房新社、二〇〇九、五三頁。解説では、先述の㉓そはおしき以外にも、㉖うくめがウブメの九州の方言であることを、九州での制作の根拠にしている。なお、㉔川太郎（ガハタラウ）も畿内・九州の呼び名である（『物類称呼』巻二「川童」、小野蘭山『本草綱目啓蒙』巻三十八「水虎」を参照［国立国会図書館所蔵］）。

(20) これらは、当時からよく知られた化物だった。各化物について、ねこまたは、田中貴子『猫の古典文学誌――鈴の音が聞こえる』講談社、二〇一四、佐伯孝弘「近世文学における怪異と猫」『清泉女子大学人文科学研究所紀要』三四、二〇一三、ろくろ首は、横山泰子「近世文化における轆轤首の形状について」小松和彦編『日本妖怪学大全』小学館、二〇〇三、雪女は、星瑞穂「近世前期の雪女像」『藝文研究』九九、二〇一〇、火車は、勝田至「火車の誕生」『国立歴史民俗博物館研究報告』一七四、二〇一二、うくめ（ウブメ）は、木場貴俊「歴史的産物としての「妖怪」――ウブメを例にして」小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造』せりか書房、二〇一〇などを参照のこと。また、手を切られる河童は、佐藤成裕『中陵漫録』に記された日向国の河伯の事例（『日本随筆大成（第三期）』三、吉川弘文館、一九七六、二九六・七頁）など、膏薬（こうやく）との関連も含めて民間伝承でよく語られている（飯倉義之「河童死して手を残す――河童遺物伝承の整理」常光徹ほか編『河童とはなにか』岩田書院、二〇一四を参照のこと）。

(21) 福岡市博物館編『幽霊・妖怪画大全集』幽霊・妖怪画大全集実行委員会、二〇一二、一一一頁。

(22) 湯本豪一編『妖怪百物語絵巻』国書刊行会、二〇〇三を元に翻刻を行った。

(23) 姫路城天守には刑部姫（長壁などとも）という化物がいるとされている。姫路城天守の怪異譚は『諸国百物語』（一六七七刊）巻五「播州ひめぢの城ばけ物の事」を皮切りによく知られていた（鳥山石燕『今昔画図続百鬼』一七七九刊、「長壁」など）。一方、その化物の正体を狐とする見方がある、井原西鶴は、『西鶴諸国ばなし』（一六八五刊）巻一「狐四天王」で「於佐賀部殿」の眷属として四天王の狐を登場させ、同『好色五人女』（一六八六刊）巻一「太鼓による獅子舞」では「とかく女は化物、姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし」と記している（『西鶴諸国ばなし』は『新編日本古典文学全集六十七　井原西鶴集二』小学館、一九九六、四五・四六頁、『好色五人女』は『新編日本古典文学全集六六　井原西鶴集一』小学館、一九九六、二六六頁による）。埴岡真弓は「十八世紀後半には、刑部姫を霊狐とする見方が全国的に広まっていた」としている（「姫路城刑部姫伝説の成立と展開」『播磨学紀要』五、一九九九、九頁）。

(24) 化物が増補されている狩野派系統本として、天保三年（一八三二）に尾田淑（郷澄）が描いた『百鬼夜行絵巻』（松井文庫所蔵）や作者不明『化物尽絵』（江戸後期、ブリガムヤング大学所蔵）、北斎季親『化物尽絵巻』（江戸後期、国際日本文化研究センター所蔵）などがある。なお、いずれにも日文研本や國松本特有の化物は描かれていない。

(25) 国立国会図書館所蔵。

(26) 国立国会図書館所蔵。片仮名を適宜平仮名に改めた。

(27) 国立国会図書館所蔵。

(28) 早稲田大学図書館所蔵。

(29) 国立国会図書館所蔵。

(30) 早稲田大学図書館所蔵。

(31) 貝原益軒編『筑前国続風土記』（一七〇九完成）巻之五（那珂郡下）には、「潮煮塚」という項目がある。

塩原の境内にして三宅村の北に有り、古へハ此辺迄潮来、塩を焼し所成故、潮煮塚と名付、塩原と云も是によりての名成と云、又此辺にも暗夜にハ折々飛火有り、遠く見れハ其大サ続松程あり、近付ハ少く色青くなりて飛事、高サ弐三間計、時に寄遅速あり、早き時ハ矢の如し、蓑嶋・塩原・住吉・比恵・高宮・野間此数邑の間を飛廻り、人近付ハたちまち消て又遠く見ゆ、或二三に分て飛事あり（国立公文書館所蔵本［農商務省旧蔵本］）

日文研本⑩は、この潮煮塚の怪火を元にしていると思われる（東アジア恠異学会での情報提供による）。

(32) 『宿直草』（一六七七刊）巻五「仁光坊といふ火の事」や山岡元隣・元恕『古今百物語評判』（一六八六刊）巻四「舟幽霊附丹波の姥が火、津国仁光坊事」、菊岡沾涼『諸国里人談』（一七四三刊）「二恨坊火」など。

(33) 西村市郎右衛門『新御伽婢子』（一六八三刊）巻三「野叢火」や鳥山石燕『画図百鬼夜行』「叢原火」など。

(34) 蝙蝠は、年を経るとノブスマ（野衾）になると考えられていた。『狂歌百物語』（一八五三刊）の「飛倉」では、「かはほり（蝙蝠）の化した飛倉は、臆病風もおこさせにけり」（梅屋）、「かはほりの老ていく世をふる社住かとなしてよはひのふすま」（花の門）などの狂歌（多田克己編『妖怪画本　狂歌百物語』国書刊行会、二〇〇八、九八・九九頁）が読まれ、桃山人『絵本百物語』「山地乳」では「蝙蝠の功をへて野衾となり」、「野鉄砲」では「ある説にハ、こうもりの、年へて野ぶすまと云ものになりたる」とある（吉田幸一編『怪異百物語』古典文庫、一九九九、二六八・三〇四頁）。ちなみにノブスマは、ムササビの別名であり、怪異の名でもあった（注（18）参照）。

謝辞：資料の閲覧、調査および図版掲載をご許可いただいた、国際日本文化研究センター、福岡県立美術館、國松良康氏に、末尾ながら深くお礼を申し上げます。また、二〇二〇年一月二六日に催された、東アジア恠異学会第一二六回定例研究会（於大東文化会館）で、本論文を元にした「日文研新所蔵妖怪絵巻をめぐって」という報告を行ったところ、本論の趣旨を補足する貴重な情報をご提供いただきました。これについても深くお礼を申し上げます。ご提供いただいた情報は、注のかたちで補足しています。

**【翻刻1】**『諸国妖怪図巻』（名称には傍線を引いた。以下、翻刻に際して、虫損など欠損により判読不能の文字については、一文字は■、複数の文字については［　］で表す。異体字は原則常用漢字に改めた。送り仮名は原文ママである）

①（前欠）付面迷ていきて［　］血を吸ふ先若御狩の時狩［　］出御小人両人をころす、太サ中猫両羽延て四尺に及へり、脊通りてわた持少し有、骨無きか如し、うすくひたくしたるもの也

②一越後国のなますか渕にて在家の子供多く失たり、或時鵜飼［　］鵜を求る、此渕を通りけるに［（如此カ）］成僧出て鵜を求給ハヽ必す片［　］鵜を求給ふへからすと色々心入る［　］といふ故忝しと言捨て別れぬ、扨■（鵜）を求るとて段々詮儀仕たれは片めの鵜勝て

宜故調て（後欠）

③一山おし是也、足長猿共いふ、さけふ声天地をかへすか如し、人を見て恐る、焚（火脱カ）を好めり、あたわ（はカ）なさす、こゝろに思ふ事をさとりいふ

④一筑前上座郡赤谷村山奥に谷有、薪取に行たる久六と云し者達者もの如此成者に出逢て無二無三に久六に組付、此もの大力にて取て投けれは、又飛おとり取付しを幾度と投付たるにやうく逃失たり、久六宿に帰りてたおれける故人々集り薬水をあたへ漸見（後欠）

⑤一筑前上座郡庄屋源蔵といふもの、此女房子を産て死する、七日をへて毎夜如此くの姿にて右源蔵か門に立、泣声頻りなり、うらめしき事いふ計成

⑥一薩摩の国浜の田より出たるもの如斯、毛坊といふ、四五歳の童子程在り、惣身赤し、毛茂りたり、蝦蟹蟹抔の年をへたるもの也、物ハ言わす、小魚を喰ふ、人を見て笑ふ

⑦一信濃国おし山より出たる毛長猿是也、是を狨といふ成へし、かしこき事人の如し、木の実を食す、又豆を喰ふ、大丈の立たるか程あり

⑧一尾州ノ山より出たる、古へ大和の国ゟ出たるなり、形大かい、カコセイと云し者成へし、瓜茄子を食す、又ハ蜻蛉蛙を喰ふ、人間へ似たるもの也、しかし犬をきらふ

⑨一加賀の国より出たる一寸坊といふ、または大頭共云、古より自然に有り、平生人の如し、食する事人におなし、長サ弐尺に足らす一借（尺）に越たり

⑩一筑前の国潮煎塚に出たる火、初め細く後には太し、もへあかり一明と飛廻りぬ、火の内に山ふしの面あり、至而あさやかなり、二つに別れる時も有、人にあたわ（はカ）なさす

⑪一大和の国三笠山にて杣人六七人是を見る、五人は急に死す、壱弐人ハ走り下る、一明のものに委しく語り、三か後病を得て死す、其後十丈程ニ見ゆる面の美しきいふはかりなり

⑫（無名）

⑬スイと云もの之人の言事を悟りしると云、戸田清現と云兵法者或時於山中て術を争ひしニ遂ニ此ものに勝すと言

⑭出雲国の海辺より出ル、飛鬼と云者也、又髪切とも言

⑮筑前国上座郡より赤口と言者、舌之長サ壱丈六尺余赤き事朱の如し、其声甚やさし

⑯播磨国姫路の城下ニ出ルもの、名未分明、或時ハ女ニなり或時ハ男ニなり、又ハ鬼ニも化也、是をヲサカベノ一族呼

⑰肥前国より出ル猫また、凡古猫は八年を越れは化ルものなり

⑱山姥

⑲尾州山より出ルかもせいというもの也

⑳薩州浦より出ルかこかさみ

㉑信濃国山中に出ル俄(エビス)なるへし

㉒信州木曽の山中より出ル此者しい、牛馬に害をなす物也、故馬屋ニ猿をつなくも此害を除為也

㉓鞍馬の山中ニ多く居ル、其他深山中ニ多、夜行之者あれハ飛付人の耳目を塞(サイ)き息を止メ其後人の血を吸うと言

そばおしき

長岡多門之書

【翻刻2】『化物尽くし絵巻』（名称には傍線を引いた。異体字は原則常用漢字に改めた。送り仮名は原文ママである）

①奥州より出る飯を食す堅き物ハ食せす、走る事犬の子の如く無毛なり、へらほうと云ものいにしへあり、其類ならん、百姓の家に生するよし、もしくハ人犬といふ物ならん

②加賀国より出る一寸坊共号す、又大あたまともいふ、古より自然にあり、平生ハ人の如し、食する事も同し

③肥後国より出る、商買(ママ)人の宿をしけるに三味線の音の聞ゆるを不審に思ひ卒度起て見るにねこまたといふならん、宿の娘の小袖

を着てかくの如く化たり

④出雲国の海浜より出る鳶鬼と号す、小き魚又ハ鳥の肉を食す、鼠をも食す、しはらくして死するといふなり

⑤尾州の山より出る、いにしへ大和国より出しよし、形大概これに似たり、かもせひと云ものなるへし、瓜茄子を食す、又ハとんほふ・蛙を食す、大さ人間に似たり、犬を嫌ふ

⑥大和国三笠山にて杣人六七人是を見る、杣人五人ハ忽に死す、内壱人走り下てしる人に是をかたる、三日以後病を得て食する事あたわすして死す、長さ十丈程に見ゆる、面の美ハしきことといふに不及

⑦越後国より出る狒々と云ものならん、惣して此類色々ある物と云、和国にハまれなるもの也、人間ハいふに及ハす牛馬鹿猪を食す、大さ具サに記すにいとまあらす、重サ三拾八貫目あり

⑧筑前国宗像郡より出る中首の事也、宗像御前の怨霊人に仇をなすとて飛行し給ひける其姿なり、正しく見る者多し、おそろしき事いふに及ハす、ひてり鬼といふすかたなるへし

⑨南都東大寺の行者吉野にて道にふミまよひて一の庵に至る亭坊の形かくの如し、眼の輝くこと闇夜も晴て日中のことし、窓塀の透間より光明あり、自ら名乗を異眼入道と云、その声四五町をひゝかす、長さ弐丈計、外の形図の如し、猪鹿山犬の類を積置、是を喰事常の人の焼鳥なとかむか如し、されば共出家なれハ人に災ハなさす

⑩肥後国熊本といふ所に弥作と云者の母、朝目覚して不図思ひ付孫の三歳になりしを引さき喰ける、家内驚きあわてける内にはたかに成てかけ出し、近所の子共二三人つかみなから山中に至り隠るゝ、其後七年過て薪伐に出る農人に出合、弥作か事を尋し形見たるを絵に写

⑪山城国あたり山の辺血洗か池より出る、長さ九尺人を数多食ふ、牛かわすといふものと老人のかたりし

⑫讃州志度浦の人釣に出けるに此形のもの来て釣たる魚を喰ひしゆへ、竿にて打けれハひしとしかみ付、舌を出してねふり、或ハ爪にてかき骨計になし、釣人の肉を喰ひ血を吸けるを、数多たくミて、後に飼付て打殺しける、海坊主是なり

⑬嵯峨より京へ通る早飛脚夜道に仁和寺の前を通る女の首計木の枝にかゝりてにこ〳〵と笑ひける、飛脚の者刀を抜追払ひけれは失て見えす、其方角の小家に火の見えけれハそれをしるへに尋行水を乞ける、主の女房横手を打只今まとろミ候内の夢に仁和寺の前に出けるを刀を抜て人の追付と見申候、其追たる人の顔付其許に少共違ハすといふを見れハ最前の首に少も違ハす、不思議におもひ其夜ハそこに宿しける、然とも飛脚の者ハ少もまとろますありけるに、女房すこしね入るよとおもへハ、糸のことき筋を引て首抜出あたりを廻る、いわゆるろくろ首是也、常の女にも咽に輪の如きひたある人ハきわめて夜ハ抜出るもの也

⑭豊前国奈良林と云一村の百姓共牛馬を失ひける事其辺おしなめて一疋も残らす、藤助と云者一人夜毎に厩に番しけるに失ハす、或夜頻になまくさき匂ひのしけるか、此形のもの入来り牛を一呑に喰ける、藤助驚き逃出て庄屋に語りけれは、其近辺深山を狩りけるに岩穴の内なまくさき匂ひしけるをしるへに岩をおこし見れハ此形也、竹鑓にて突留ける、高サ六尺、八畳敷程口の広サ壱丈壱尺、しゝこりといふ物と老人のかたる

⑮播磨国姫路の城下に住ける町人の子共七ツ八ツに成りけるか行方しらす失けり、隣に住ける者の見たる咄を聞は、友達のやうなる見馴ぬ者来て裏に竹垣の有ける辺にて招きよせて敷革の様なる物をすそよりひろけ、其上に子共をのせて愛しけるか、無レ程引包て腹をたゝきて帰りしと云、其ありさま見堂流ことくに写

⑯筑前国上座郡林田と云所の猟師雉子塒に入夜待しけるに、夜深くしてとろ〳〵とまとろミける内に物に包て上に引上るやうに覚えけるか、目覚ましゑ猟脇指を抜切払ひけれは舌の先と覚えて毛氈の様なる物切落し血顔にかゝりけるを押拭ひ空にわめきて声の聞ゆる方を見れハ、如此形のもの雲を起し深山に入けれハ、其儘帰りて村中の若者を集め血の流のしるしを尋けれとも見えす、夜中に見たる形なれハ相違もあるへけれと大形絵に写

⑰信州木曽の奥に馬の煩ふ事民家一軒ものこらす流行して無レ程死けれハ所の者村廻りしてけるに、童子のこときもの草の葉を持厩の口にて躍けるをとらゑんとしけれは、早き事電光の如く、空中をかけつて逃失けり、其後老人の言に従ひ猿をあまたかひけれハふたゝひ不レ出、しいと云ものならん、見し形かくの如し

⑱陸奥国より当夏を望む僧一人夜道に下野国那須野辺に草庵のありしに立寄、湯を乞けれハ亭坊もなし、人の死骸山の如く積ミ置たる計也、おそろしく逃んとする時後の侍（持カ）仏堂の様なる

一間の障子を開具すくと鼻ひきける、形如此、後におもひ合すれハ猫股といふものならん

⑲奥州仙台より武州江戸に趣きける者、冬の旅寒気にうたれ身労れ雪深して前後を不レ弁折節、年若して白髪の女衣服顔色すへて白く覚えしか来て道をしへ雪はらひなとし介保し通しける、形勢見し如く絵に写す、人にあたハなさす、雪女是ならん

⑳筑後国松崎山の内、地の底に物のうめきし声聞へ、地ひゝきしけるを所の者堀（掘カ）かへして見けれハかくの如き形のものありけり、鬼土鼠といふものと老人の申き

㉑栂尾（ママ）の山中を常にくるしき声して啼通りける、腰より上はかりにて空中を歩ミ行、名しれす、山海経等にも見えす

㉒戸田清現と云兵法者山中にて術を争ひ勝負をする、獅と云けたものなり、人の思ふ事を知るといふ

㉓人の顔に飛付、羽にて息をとめ筋にて首をしむる、俗にいふそはおしきといふものならん、鞍馬の山中にて願行院と云山伏をしめころし血を吸けるを同所の者見たる様を記す

㉔筑前の医家に災をなさんとして手を切られ其手を所望に来り候、かたちかくのことし、川太郎と俗に云、力量人に越たり、常に角力をこのむといふ

㉕大和国石塚の内より出る所々にも深山の塚の内にあるものなりと老人申き、俗にいふ野守鬼といふものならん

㉖㉗肥前国嶋原の城下に住町人の妻産前臨月に至り、いさゝかの事有て離別し外に妻を求む、先妻此事を思ひ死にしにけり、既に一七日に当りける夜彼町人の庭に雨嵐風はけしく吹、電光昼の如く也、恐しく思ひ見る所に死たる女赤子をいたき走り来りぬれハ、牛頭馬頭の鬼黒雲を起し火車もへ廻りたるに、女子ともにかきのせ雲をわけ雨を踏立空中に登りける、其後も毎々出ける、其形所の者能見たるを写、俗に云うくめならん、女子共ニさけぶ声青鷺の鳴かことしと云

【翻刻3】『怪奇談絵詞』（名称に傍線を引いた）

⑨筑前の国上座郡赤谷村山奥に谷川有り、延享の比薪取に出たる久六と云達者なる者出会たり、野女出て、無二無三に久六に組付たり、此者大力にて取て投けれハ又飛かゝり飛つくを幾度ともな

く投つくるに、漸逃失ける、久六宿へ帰りて絶入しけるが人々打寄薬よ水よとあわて与へけれハ息■たり、腥(なまくさ)き事限りなし、野女と言ものゝよし

㉔上座郡に庄屋源蔵と言者女房難産にて死けり、七日経て毎夜けん蔵がかどに立てあふひニ泣、其声うらめしき事言ばかりなり

㉕陸奥の国より当夏を望む僧壱人夜道に下野の国那須野の辺に草庵の有けるに立寄湯乞けれハ亭坊もなく、人の死骸山の如く積たり、恐ろしく逃出さんとする後より持仏堂の様なる所の障子一間を明けくすくゝと鼻引音しけるに驚き見けるに、形チ斯の如し、猫またの類ひならん

㉖河太郎という者なるか、人を喰ふ、相撲を好、頭にくぼみあり、水溜る、水なきときは力なきよし

㉗越後の国鯰か渕にて在所の子供余両失たり、或時鵜つかふ者鵜を求るとて此渕の鳥(辺カ)を通る時、斯の如き法師出て、鵜を求め給ハゝ必片目の鵜を求め給ふへからすと心入をいふゆへ、忝しと挨拶してわかれ鵜を求るに片目の鵜あり、勝れて宜敷ゆへに調へて帰る時、又右の渕の前を通るに片目の鵜はね廻渕に飛入て大鯰を取たり、壱間半程有ける、不思儀なる事ともなり

㉙大和国三笠山にて杣人六七人是を見る、五人は急死す、壱人走り下り知人に是を語るに、三日を経て病を得て死す、顔の美しき事斯のごとし

㉚嵯峨より京へ通る早飛脚夜道に仁和寺の前を通りけるに、女の首計杖(袂カ)にかゝりてにこくゝと笑ふ、飛脚刀を抜て切払ひけれは失て見へす、其方角の小家に火の見へしをしるして尋行水を乞ける、主の女房の顔を見れハ只今の首に少しも違わす、此女房横手を打たゝき、今まとろみの夢の中に、仁和寺の前にいでけるに、刀を抜て人の追かけたるは其許に少しもかわらすとそ申ける、不思儀におもひ、其夜は爰に宿しける、かの女房ちと寝入よと思へハ、糸の如き筋を引て首抜出そこ爰ところめき廻る、是所謂ろくろ首也、常に女の首に輪のあるは抜るといふ

表１　佐脇嵩之『百怪図巻』と『諸国妖怪図巻』比較

| 『百怪図巻』 | |
|---|---|
| | 名称 |
| 1 | 見越入道 |
| 2 | しやうけら |
| 3 | へうすへ |
| 4 | ぬれ女 |
| 5 | かわつは |
| 6 | がごぜ |
| 7 | ぬらりひよん |
| 8 | くはしや |
| 9 | うぶめ |
| 10 | ぬつぺつほう |
| 11 | わいら |
| 12 | おとろし |
| 13 | 山びこ |
| 14 | ぬりほとけ |
| 15 | わうわう |
| 16 | 夢のせいれい |
| 17 | 山うは |
| 18 | 犬神 |
| 19 | ぬけくひ |
| 20 | 山わらう |
| 21 | うわん |
| 22 | あか口 |
| 23 | うし鬼 |
| 24 | 目ひとつほう |
| 25 | ゆふれゐ |
| 26 | ふらり火 |
| 27 | ゆき女 |
| 28 | 野狐 |
| 29 | 猫また |
| 30 | かみきり |

| 『諸国妖怪図巻』 | | | 対応する『百怪図巻』 | |
|---|---|---|---|---|
| | 名称 | 場所 | | 名称 |
| 1 | ▲ | | | |
| 2 | （僧） | 越後国なまずが渕 | | |
| 3 | 山おし・足長猿 | | | |
| 4 | （如此成者） | 筑前国上座郡赤谷村 | 24 | 目ひとつほう |
| 5 | （女房） | 筑前国上座郡 | 9 | うぶめ |
| 6 | 毛坊 | 薩摩国浜の田 | | |
| 7 | 毛長猿・狒 | 信濃国おし山 | | |
| 8 | カコセイ | 尾州・大和の国 | 21 | しやうけら（うわん？） |
| 9 | 一寸坊・大頭 | 加賀の国 | 7 | ぬらりひよん |
| 10 | （火） | 筑前の国潮煎塚 | | |
| 11 | ▲ | 大和の国三笠山 | 4 | ぬれ女 |
| 12 | ▲ | | 6 | がごぜ |
| 13 | スイ | | 15 | わうわう |
| 14 | 飛鬼・髪切 | 出雲国 | 30 | かみきり |
| 15 | 赤口 | 筑前国上座郡 | 22 | あか口 |
| 16 | ヲサカベノ一族 | 播磨国姫路の城下 | 28 | 野狐 |
| 17 | 猫また | 肥前国 | 29 | 猫また |
| 18 | 山姥 | | 17 | 山うは |
| 19 | かもせい | 尾州 | 2 | しやうけら |
| 20 | かこかさみ | 薩州浦 | 3 | へうすへ |
| 21 | 俄（ユビス） | 信濃国 | 13 | 山びこ |
| 22 | しい | 信州木曽 | 20 | 山わらう |
| 23 | そばおしき | 鞍馬の山中 | 26 | ふらり火 |

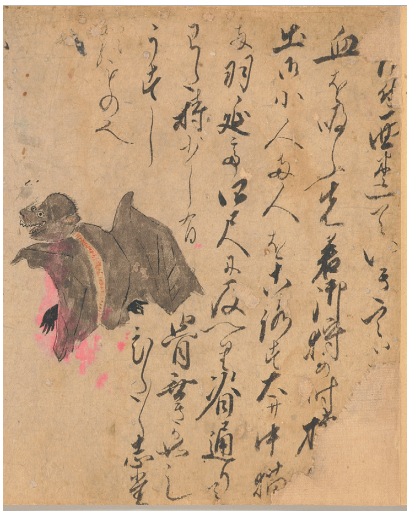
▲は無記名のもの、丸括弧内は固有名詞ではないが詞書の化物を指す語

表２　『化物尽くし絵巻』と『百怪図巻』『諸国妖怪図巻』の比較

| | 『化物尽くし絵巻』 | | 対応する『百怪図巻』 | | 対応する『諸国妖怪図巻』 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 名称 | 場所 | | 名称 | | 名称 |
| 1 | へらほう・人犬 | 奥州 | 10 | ぬつぺつほう | | |
| 2 | 一寸坊・大あたま | 加賀国 | 7 | ぬらりひよん | 9 | 一寸坊・大頭 |
| 3 | ねこまた | 肥後国 | 29 | 猫また | 17 | 猫また |
| 4 | 鳶鬼 | 出雲国 | 30 | かみきり | 14 | 飛鬼・髪切 |
| 5 | かもせひ | 尾州・大和国 | 2 | しやうけら | 19 | かもせい |
| 6 | ▲ | 大和国三笠山 | 4 | ぬれ女 | 11 | ▲ |
| 7 | 狒々 | 越後国 | | | | |
| 8 | 宗像御前の怨霊・ひでり鬼 | 筑前国宗像郡 | 6 | がごぜ | 12 | ▲ |
| 9 | 異眼入道 | 吉野 | 1 | 見越入道 | | |
| 10 | （母） | 肥後国熊本 | 25 | ゆふれゐ | | |
| 11 | 牛かわす | 山城国 | 11 | わいら | | |
| 12 | 海坊主 | 讃州志度浦 | 14 | ぬりほとけ | | |
| 13 | ろくろ首 | 仁和寺 | 19 | ぬけくひ | | |
| 14 | しゝこり | 豊前国奈良林 | 12 | おとろし | | |
| 15 | ▲ | 播磨国姫路の城下 | 28 | 野狐 | 16 | オサカベノ一族 |
| 16 | （如此形のもの） | 筑前国上麻郡林田 | 22 | あか口 | 15 | 赤口 |
| 17 | しい | 信州木曽 | 20 | 山わらう | 22 | しい |
| 18 | 猫股 | 陸奥国 | 18 | 犬神 | | |
| 19 | 雪女 | 奥州仙台～武州江戸 | 27 | ゆき女 | | |
| 20 | 鬼土鼠 | 筑後国松崎山 | 23 | うし鬼 | | |
| 21 | ▲ | 栂尾の山中 | 16 | 夢のせいれい | | |
| 22 | 獺（スイ） | | 15 | わうわう | 13 | スイ |
| 23 | そはおしき | 鞍馬の山中 | 26 | ふらり火 | 23 | そばおしき |
| 24 | 川太郎 | 筑前 | 5 | かわつは | | |
| 25 | 野守鬼 | 大和国 | 21 | うわん | 8 | カコセイ？ |
| 26 | 牛頭馬頭の鬼・火車 | 肥後国嶋原 | 8 | くはしや | | |
| 27 | うくめ | 肥後国嶋原 | 9 | うぶめ | 5 | （女房） |

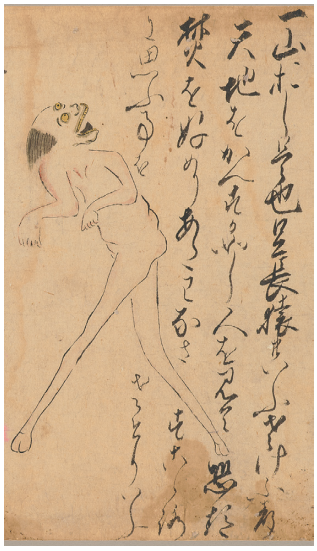
▲は無記名のもの、丸括弧内は固有名詞ではないが詞書の化物を指す語

図1　『諸国妖怪図巻』

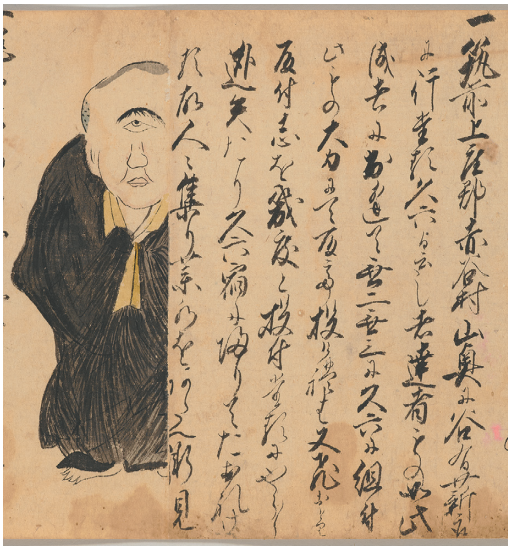


①

②



③



④

⑥

⑤

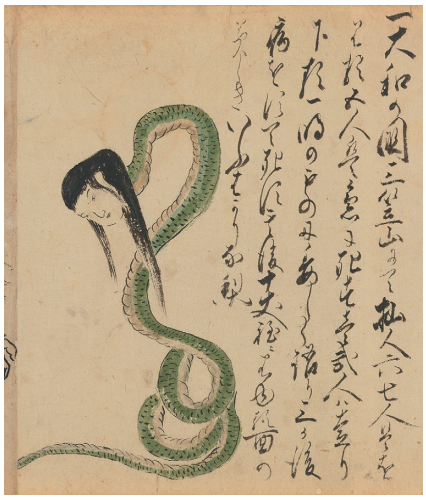
⑧

⑦

⑩

⑨

⑫



⑪

⑭

⑬

⑯

⑮

⑱

⑰

⑳

⑲

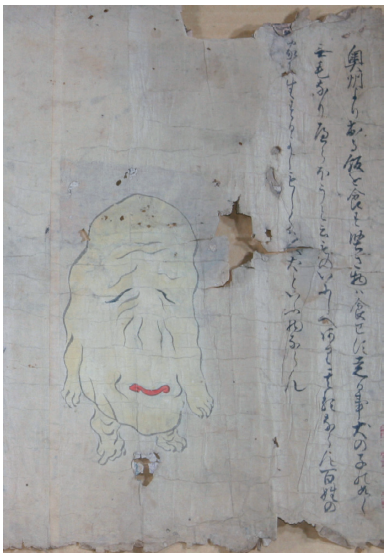
㉒

㉑

㉓

図2　『化物尽くし絵巻』

②



①

④

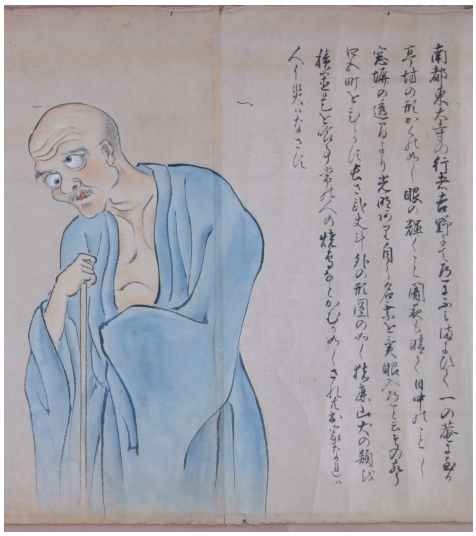
③

⑧

⑤

⑧

⑦



⑨

⑩

⑪

⑫

⑭

⑬

⑯

⑮

⑱

⑰

⑳

⑲

㉒

㉑

㉔

㉓

㉖

㉕

㉗

図3　『怪奇談絵詞』

㉔

⑨

㉖

㉕

㉙

㉗

㉜

㉚